

令和8年度
富山市民
感謝と誓いの
つどい

とき 令和8年8月1日(土) 午後1時30分
ところ 富山電気ビルディング 5階大ホール

主催／富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

富山市自治振興連絡協議会 富山市老人クラブ連合会 富山市母親クラブ連絡協議会 富山市中学校長会	富山市社会福祉協議会 富山市民生委員児童委員協議会 富山市PTA連絡協議会	富山市遺族会 富山市児童クラブ連絡協議会 富山市小学校長会
--	---	-------------------------------------

小学生絵画最優秀賞

三四年生の部



「音楽と夢にあふれるまち」
富山市立中央小学校4年 米田 葉里さんの作品

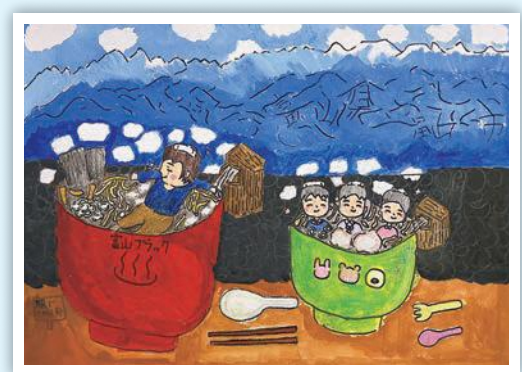
小学生絵画優秀賞

三四年生の部



「人とロボットみんなでおわら風の盆」
富山市立奥田小学校4年 風間 桜さんの作品

三四年生の部



「ゆめのブラック温泉」
富山市立光陽小学校4年 千葉 緋奈乃さんの作品

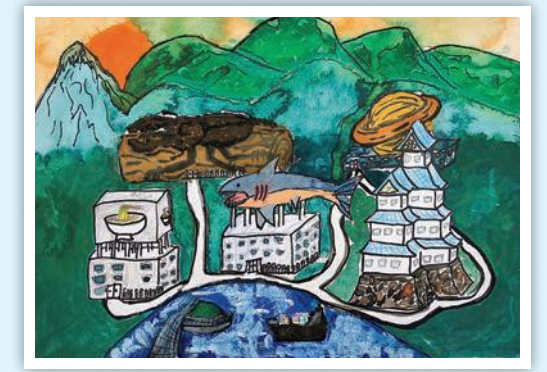
未来の富山市

五六年生の部



「キラキラ輝く未来の富山市」
富山市立中央小学校6年 神永 結衣さんの作品

五六年生の部



「未来の博物館」
富山市立新庄北小学校6年 井口 義基さんの作品

五六年生の部



「海との共生」
富山市立神通碧小学校6年 野崎 佳歩さんの作品

未来に語り継ぐ 富山大空襲の記憶

富山大空襲の記憶を未来に語り継ぐため、空襲体験者インタビューや戦禍をくぐり抜けた遺品をホームページで公開し、戦争の悲惨さと平和の大切さを後世に伝えていきます。



HPIはこちら

このプログラムは再生紙を使用しています。

「未来を創るみなさんへ」

長谷川 幹雄さん
〔令和七年七月寄稿〕

私の名前は幹雄といいます。実は私には兄と姉がいたのですが、二人とも夭折してしまいました。もしかして、今の世の中ならばもっと生きていたかもしれません。その当時は戦時中で物資も乏しく、十分な医療も受けられなかったのでしょう。そして、生まれた私には木の幹のように太くたくましく育ってほしいという願いを込め、幹雄と名づけられました。

さて、富山大空襲があった時には、私はまだ星井町国民学校の一年生でした。住んでいたのは富山市西中野町、そこに祖父母、両親、二十歳になる従姉、三歳になる弟、七人で住んでいました。

空襲の前日、八月一日は夜に空襲警報が鳴りました。家のすぐ前に七、八人が入る防空壕があったので、家族でそこへ避難をしました。しかし、その後は何も起こらなかったで、家に戻り安心して寝てしまいました。すると、夜中にまた空襲警報がなり、今度は本当に爆弾が落ちてきました。また、さっきの防空壕へ行きましたが、その時はすでに避難している人達がい、私達はそこへは入らずに逃げることにしました。逃げる時には祖父母、両親と弟、従姉と私というペアになってそれぞれが避難し、南富山の四谷酒店で落ち合うと家族で決まっていた。その頃、その辺りは一面に田んぼが広がっていて、そこには爆弾は落と

さないと考えたのでしょうか。

私は従姉に手をつながれ逃げました。振り返ると白い洋館だった自宅が火をあげて燃えていました。どういう道をどう逃げていたかはよく覚えていません。ただただ燃える家、落ちてくる爆弾や火の粉の中を従姉に手をつながれて必死に逃げたことを覚えてます。私達だけではなくみんな必死でした。従姉はこの時、「もし、家族が死んでしまったら、この子は私が育てるのかしら。」と思ったそうです。

どれだけ逃げたでしょうか。空が明るくなり始めた頃、家族で決めていた場所に着きました。そこには、祖父母の姿がありました。次に母が弟をおぶって、灰やススで真っ黒になった顔でやってきました。でも、父の姿はありません。母は私達と落ち合うと、ふらふらと歩いて周りの人達に父を見なかったか、聞いて回っていました。母はほうほう尋ね歩きましたが結局、父の消息はわからず、なかば狂ったようになっていました。お父さんが死んでしまったのかもしれない、そんなことを思いながらその日は終わりました。

そして、次の日がやってきました。遠くから父が歩いてやってきました。生きていたのです。後で聞いた話では当時、富山市立女子高等学校の教員であった父は、学校の奉安殿にある天皇陛下の肖像を空襲から守るために学校へ行き、消火活動をしていたそうです。今思うと、校長や教頭でもないのになぜ父がそんなことをしなければならぬか不思議ですが、自宅から学校が近いので、そんな役目を言い渡されていたのかも知れません。

私達の家族は全員が奇跡的に大空襲から生

き延びることができました。家のあった場所に戻ると、家は跡形もなく燃え尽きていました。父が入ることのできなかった防空壕を見に行くと中で三、四人の人が蒸し焼きの様になって死んでいると話をしていました。火が燃え盛る中、一酸化炭素中毒にでもなったのでしょうか。今考えると私達もそこへ避難していたら、こうして生き残っていなかったのかもしれない。

大空襲から生き延びても、次に生活を立て直すことが大変でした。市中に住んでいたのに食糧を手に入れることが大変で、神通川を母と渡り、着物と米を交換しに行ったことを覚えてます。

【以下、代筆された子の隆様より】
私は父から、幼い頃に富山大空襲があり、命からがら逃げたことを度々聞いていました。これはこの貴重な体験を父から聞きとりながら、その体験を綴ったものです。

父は今年八十七歳、そして、一緒に逃げた従姉は九十九歳になります。どんな様子であったかは想像するしかありません。戦争の記憶が薄れてきている中、これからの未来のために、貴重な体験を語り継いでいかなければならないと思、筆をとりました。

世界に目を向けると今まさに戦争状態である国はまだあります。戦争は多くの人の命や家、希望を奪います。父の記憶がこれからの未来を担う人達がみんなで平和に暮らせる世の中を創る、そんな一助となることを願っています。

「『諦めない』こと」

富山市立城山中学校三年 青山 聖佳さん

「諦めない」という言葉は、私達中学生もよく使う言葉だ。成し遂げたい目標を掲げた時、「最後まで諦めず頑張りたい」というフレーズを私はよく使う。だが、信じられないような困難な状況に直面した時、私はそれでも「諦めない」と言い切ることが出来るのだろうか。私は、平和学習や広島での修学旅行を通じて「諦めない」という言葉を深く考えることになった。

一九四五年八月二日未明、米軍の爆撃を受け、富山市街地は焼け野原になった。富山大空襲だ。当時の富山市街地の九十九五%が焼失したが、これは全国の焼夷率だという。合計約五十万本もの焼夷弾の雨が、秒速「五〇から三〇〇メートルで地上に降り注ぎ、二千七百人を超える方が亡くなった。目の前が暗くなるほどの恐怖と絶望だ。資料として残されている焼け跡の写真は、ただただ悲しく苦しい。今富山に住む私には、あの焼け野原の写真が過去の富山だととても信じられなかった。雄大な立山連峰、松川べりの桜、チューリップが咲き誇り、ライトレールが颯爽と走行して行く。近所の人と挨拶し、友達と笑い合い、家族で美味しいご飯を食べる。私達の当たり前がすべて、多くの先人の方が復興を、生きることを諦めなかったからあるのだと、気づかされた。地獄のようなあの

焼け野原で「諦めない」ことを選ぶ強さに、感謝と尊敬と切なさで泣きそうになった。

広島での修学旅行でも「諦めない」人達について学んだ。驚いたことに、それは私達と同じ子どもだった。原爆ドームは、第二次世界大戦末期に人類史上初めて使用された核兵器により、被爆した建物だ。戦後、街の復興が進む中で、「悲しい思い出を消したい」と取り壊しの話が出る中、署名活動で原爆ドームの保全を訴えたのは、私達と同年代の子ども達だったそうだ。「あの痛々しい産業奨励館（原爆ドーム）だが、いつまでも、恐ろべき原爆のことを後世に訴えかけてくれるだろう？」と日記に記した一歳で被爆した猪山さんは、十六歳で白血病のため亡くなった。この日記に心を打たれた広島折鶴の会の子ども達が署名を集め始め、原爆ドームは保全されることが決まった。広島折鶴の会は二歳で被爆し、十二歳で白血病になりながらも、病床で生きることを最後まで諦めず、一三〇〇羽以上千羽鶴を折り続けた楨子さんの物語に影響を受けた中高生の会だそうだ。

世界情勢は不安定で、今も戦争や紛争はなくならない。ずっとだ。ずっとどこかで命は奪われ続け、苦しみ続けている人がいる。それも理不尽に。悔しいし悲しい。私はまだ子どもだ。それでもできることは必ずあると思った。学び続け、考え続け、平和を諦めてはいけなと思うた。

「美しき立山」

富山市立新庄中学校三年 滝澤 燈さん

「立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし」「立山に降り置いている雪は夏のいま見ても見飽きることがない。神の山だからに違いない。」越中国守として赴任した大伴家持の歌だ。「万葉集」には立山連峰や富山湾の美しい自然が多数詠まれている。私も晴れ渡った空に、はつきりと見える山の端と山際の差、あの雄大な立山連峰にいつも心が洗われる。四季や自然の美しさ、そこに心を奪われ癒されることは、古から変わらずあり続けてきたのだと思う。

しかし、あの日はどうだったのだろう。一九四五年八月一日から二日にかけて起きた富山大空襲。

私は曾祖母からその日の話を聞いたことがある。私の曾祖母は高岡市の生まれで、その日も高岡市の自宅で過ごしていた。深夜、大きな飛行機音が聞こえてきたので、慌てて外に出て空を見上げると、無数のB29が富山市に向かって飛んでいったそう。そこからあつという間に富山市全体が赤く染まり、「富山市が大変なことになった。こわい、こわい。」と震えが止まらなかったそう。

九十を過ぎたころから、曾祖母は少しずついろいろなことを忘れてしまうようになった。だが、八十年前に体験した戦争のことだけは、いつも鮮明に聞かせてくれた。高岡市からの距離でも

真つ赤に燃え上がっていた富山市の様子を、恐怖とともに語ってくれたあの真剣な目を、私はずっと忘れない。

現在、私の周りには戦争体験者が一人もいなくなつてしまった。富山大空襲のことや、その日の立山の様子は、本や写真を通してしか知ることではきないし、想像することしかできない。でも、決して歴史上の出来事にしてはならない。風化させてはいけない。確かに経験した人から聞いたのだから、今に、これからの受け継いでいく必要がある。

そのバトンを受けた今の自分にできることは、感謝の心を忘れないこと、調べ知っていくこと、自分の言葉で伝えていけるよう、とにかく学ぶことだ。今、私のがんこのわだかまりもなく純粹に立山を美しいと感じることができるのは、あの日からこの八十一年間、先人たちが並々ならぬ苦勞をしながら、富山を愛し発展のためにご尽力くださったからだ。誰もが雄大な立山連峰に心癒され、ただただ富山の自然を美しいと感じられる「心」こそが平和の象徴なのだと感じる。

「私たちの役目」

富山市立尾中学校二年 井山 志帆さん

「これは本当に富山で起きた出来事なのか」これは私が富山大空襲のことについて知ったときの初めての感想だ。なぜなら今の富山は美しい山や海、住んだ空気にめぐまれていて住みやすい。自然が身近でありながら、生活の便利さや安心して学校に通える、非常に暮らしやすい地域だ。しかし現在の平和な富山県からは想像できないほどにとっても悲惨な過去がある。

一九四五年八月二日午前〇時頃、米軍のB二九大型爆撃機二七四機が、富山市中心部に五十万発以上の焼夷弾を投下し、町の景色は一変した。この「富山大空襲」は市街地の九十九五パーセントを焼き尽くし、被災した人はおよそ十二万人、地方都市としてはとても大きな被害だったそう。あちこちに積み重なる遺体、人々の叫びや助けを求める声が町中に響く。当時の人々の不安や恐怖は計り知れないものだったと思う。想像するだけで胸が痛くなるような残酷な出来事だ。

私は今回空襲について調べるまでは、戦争については全くと言っていいほど知らなかった。しかし、当時の様子を知ること、今当たり前のように過ごしている毎日が決して当たり前ではないことに気付かされた。もしも今日、家族に言った「行ってきます」が最後の言葉だったとしたら、普段何気なく交わしているあいさつも、とても大切な言葉の

ように感じる。時代が移り変わり、空襲を知る人の高齢化が進み、その体験を直接聞く機会は少なくなっている。だからこそ、私達が戦争の恐ろしさや、平和の大切さを学び、次の世代へ伝えていくことが重要だと感じた。

そして平和な時代の中で受け継がれてきた富山県の文化や伝統を未来へ繋いでいくことが私達の役目ではないのかと考える。富山市には「おわら風の盆」という全国的にも有名な伝統行事がある。優雅な踊りや哀愁のある音色は日本各地だけでなく海外からも多くの人々が訪れ、多くの人々を魅了している。私はおわら風の盆の踊り手として毎年行事に参加している。また、中学校の郷土芸能部にも所属しており三味線を演奏している。そのため、おわら風の盆は私にとってとても身近な存在であり、富山県の大切な伝統文化の一つだと感じている。このような伝統芸能を今も楽しみ、受け継ぐことができているのは、先人たちが苦しい時代を乗り越え、平和な社会を築いてくれたからだと思う。

私は今回の学習を通して、平和は決して当たり前のものではなく、多くの人々の苦しみや努力の上に成り立っていることを学んだ。私は過去に起きた出来事を忘れずに学び続けるとともに、富山県の文化や伝統にも関心を持ち、その魅力を次の世代へ伝えていきたいと思っている。また、家族や友人と過ごす何気ない日常に感謝し、一日一日を大切に、戦争のない平和な社会の実現について考え続けていきたい。

式典

1.国歌斉唱

2.黙とう

3.開会あいさつ

富山市長 藤井 裕久

4.中学生作文最優秀作品の発表

「『諦めない』こと」 富山市立城山中学校3年 青山 聖佳さん

5.富山大空襲体験文の朗読

「未来を創るみなさんへ」 長谷川 幹雄さん

朗読／声のライブラリー友の会 林 由美子さん

6.代表献花及び一般献花

演奏／レーベン弦楽四重奏団

第1ヴァイオリン 渋谷 優花さん

第2ヴァイオリン 藤田 千穂さん

ヴィオラ 高田 愛子さん

チェロ 舘野 真梨子さん

7.閉会あいさつ

富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会 会長 北岡 勝



戦災復興記念像(天女の像)

建立 昭和49年8月1日 **場所** 富山城址公園自由広場北西側

碑文 昭和20年、太平洋戦争は激烈の度を加え、8月2日未明に、富山市は、B29百七十余機の焼夷爆弾攻撃を受け、市街地は一夜にして焦土と化しました。約2万5千の世帯、11万人の市民が罹災し約8千人が重軽傷を負い、2千7百余人の尊い命が失われ、まさに、壊滅的な状況になりました。惨憺たる焦土と、絶望の虚脱の中から、富山市民は、平和を渴望し郷土の復興に気力を燃やし、槌音高く、県都富山の再建に立ち上がりました。市民の決意と総力の結晶が実を結び、戦災復興の大事業が完成し、今日の近代的都市に生まれ変わりました。

この天女の像は、恒久の平和を念願するとともに、尊い犠牲に敬虔な祈りを捧げ、市民の努力による偉大な業績を記念して、富山復興特別事業協議会により、昭和49年8月1日に、戦災復興記念像として建立されたものです。

平成20年8月1日 富山市